

様式7-1

平成18年度開始 交付金プロジェクト研究課題 事前評価結果

課題名：基準・指標を適用した持続可能な森林管理・計画手法の開発

主査氏名（所属）：佐藤 明（研究管理官）

担当部署：森林管理研究領域、植物生態研究領域、森林植生研究領域、森林遺伝研究領域、森林昆虫研究領域、森林微生物研究領域、野生動物研究領域、立地環境研究領域、水土保持研究領域、気象環境研究領域、林業経営・政策研究領域、海外研究領域、東北支所、関西支所、九州支所

参画機関：静岡県林業技術センター、兵庫県森林林業技術センター

研究期間：平成18～22年度

1. 目的

生物多様性や国土保全など、森林の多面的機能に対する国民のニーズは大変高い。それに対する国際的な回答が「持続可能な森林経営」であり、持続可能性は「基準・指標」により科学的に測定されるとされている。森林総研ではこれまで基準・指標の計測に関する研究を行ってきたが、今後は、実際の森林計画・管理への基準・指標の適用が必要で、そのための手法開発が必要である。そこで、本課題では生物多様性や森林健全性の評価モデル、林業生産の指標などを総合的に評価する手法を開発し、この手法を用いた森林計画・管理手法を開発し、実際の森林計画に役立てることを目的とする。

2. 終了時に得たい成果

過去の研究で開発された指標の測定手法の科学的透明性と実用性を検証し、森林計画・管理に適用するために、森林情報と関連づけて評価できる生物多様性動態予測モデルを開発する。また、森林の健全性を損なう生物被害と非生物被害について、環境要因・林分要因からの評価を行い、森林計画・管理に適用可能な森林の健全性に関する危険度予測モデルを開発する。生物多様性動態予測モデル、森林の健全性の危険度予測モデルなどから総合的な評価手法を開発し、日本の森林計画への基準・指標の適用手法を提示する。

3. 評価委員の氏名（所属）

松村直人（三重大学生物資源科学部教授）

4. 評価結果の概要

国連森林フォーラムで議論中の「基準・指標」の森林計画への応用に関する本研究は、まさに時宜を得たものである。研究の推進に当たっては、多分野多要素にわたることから、お互いの研究成果の受け渡し、共通認識の形成が重要と思われる。これまでの研究成果、データ蓄積を生かし、各分野別研究者の時間スケール、空間スケールを相互に調整し、「基準・指標」を森林経営へ適応したモデルを提示して欲しい。また、行政担当者や広く一般にも理解できるように研究成果を発信して、成果の普及を期待したい。

5. 評価において指摘された事項への対応

評価委員の指摘どおり、本研究の性格からお互いの空間スケールの整合、研究成果の受け渡し、共通認識の形成が極めて重要であることから、推進責任者を中心に連携を密にとりあって研究を進めて参りたい。また、研究成果の発信にあたっては、行政担当者や一般市民にわかりやすい言葉で成果の普及に努めたい。